

広域的にみた環境特性
歴史的な変遷 - 2

新田開発時の集落形態を以下にまとめる。

- ・環境負荷軽減との役割を果たしていた屋敷林や雑木林が今日では街の景観要素となっている。
- ・五日市街道沿いはかつて桑苗の生産が盛んで、大正時代には全国一の生産量となっていたようだ(立川市歴史民俗資料館出典資料より)。現在は隣接する国分寺市含め植木の生産地としても有名で、計画地の周辺にも何件かの圃場が確認できる。圃場は新田開発時の短冊状の敷地割の面影が残っている。



昭和30年頃の五日市街道(出典:立川市HP)



立川市緑の十二景「若葉町の大ケヤキ」
(出典:立川市HP)



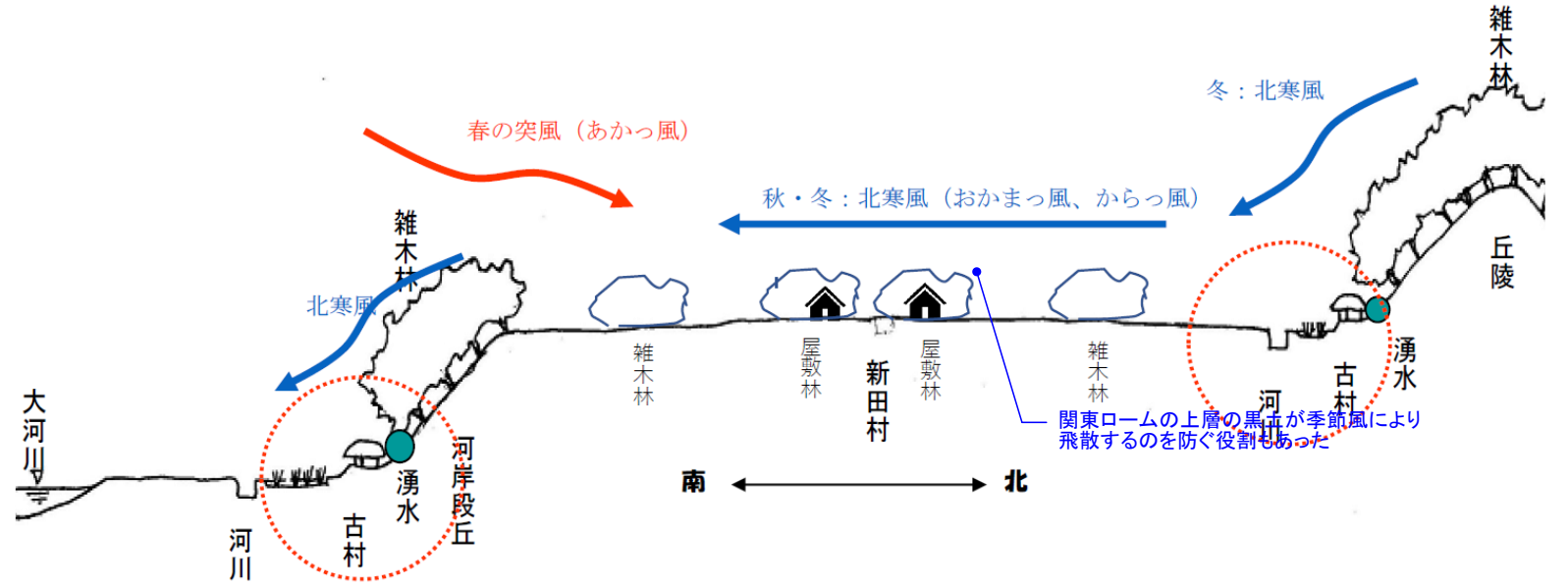
若葉町団地北側の雑木林



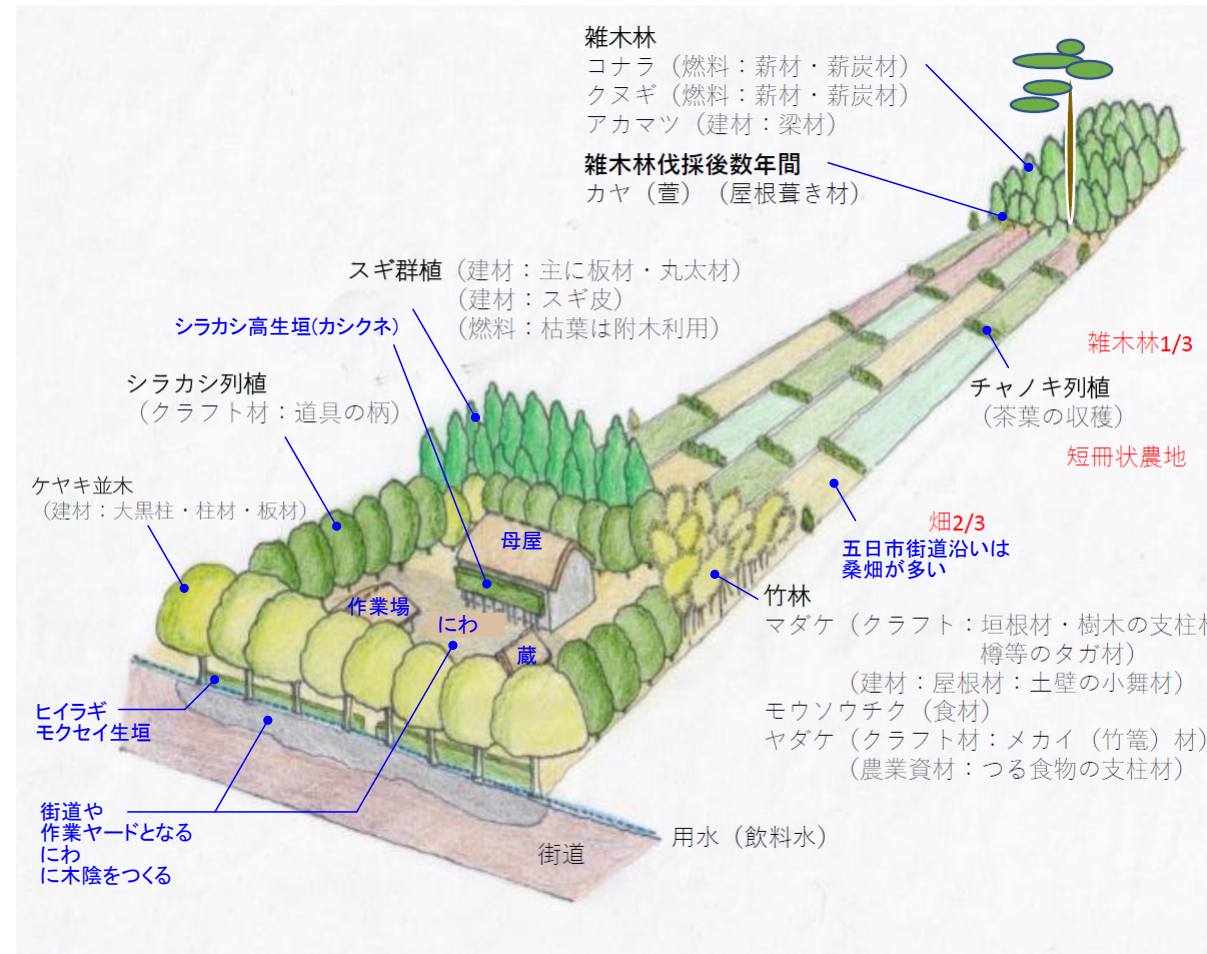
桑苗の出荷(高松町 大正時代)
(出典:立川市歴史民俗資料館)



宮内省への桑苗納入記念(大正11年)
(出典:立川市歴史民俗資料館)



武蔵野台地周辺の集落に付帯する雑木林、屋敷林の成立要因図(出典:国指定重要文化財旧高橋家住宅屋敷林調査報告書)



武蔵野台地周辺の集落モデル(出典:国指定重要文化財旧高橋家住宅屋敷林調査報告書)
※筆者が筆は青字

屋敷林、雑木林の環境負荷軽減の役割

ケヤキ並木
母屋の南側に列植される。街道に面している場合には街道沿いに列植され、南風を和らげるとともに大きな緑陰で灼熱を防いでいる。

シラカシ列植・高生垣
母屋の北側に家屋を囲むように列植して冬の寒風を防ぐ。母屋・蔵作業棟および庭を囲んで西側および東側に列植し、東西の風を防ぐ。高生垣は母屋の南側に縁側等に沿って列植され、高く刈込まれ、夏の熱射から居室環境を守っている。

竹林
母屋の北東側に群生させ、冬の北東からの季節風を防ぐ。

ヒイラギモクセイ生垣
春の突風による土埃を防ぐ。東・西側のシラカシ列植下に設ける場合もある。地表面すれすれまで枝葉が密生し、土埃の侵入を防ぐ。耐火樹でもあるため延焼防止の役割もある。

チャノキ列植
茶葉をとるために刈込むチャノキは、刈込むことで地際から密生した生垣となり、防風効果と土止め効果がある。

チャノキ列植
茶葉をとるために刈込むチャノキは、刈込むことで地際から密生した生垣となり、防風効果と土止め効果がある。

雑木林
薪炭材としての活用の他、防風林としての役割も果たす。

屋敷林や雑木林の落ち葉
堆肥としてもとは
痩せ地だった関東ローム層の赤土にすき込んで土壌改良をし、肥沃な黒土(黒ボコ土)を精製していった。

